

Washino 粘性毛管モデルの数式解説 (cohesion_model_washino_capillary_viscoous.h)

Open DEM Japan

2025年6月29日

系は半径 r_i, r_j の 2 粒子（あるいは粒子と壁）間に形成される液架橋を扱う。粒子間距離を r ，粒子表面間最短距離を

$$\delta = \begin{cases} r - (r_i + r_j), & \text{粒子-粒子の場合} \\ r - r_i, & \text{粒子-壁の場合} \end{cases} \quad (1)$$

とする。

架橋液量 V_b は各粒子（または壁要素）に含まれる表面液量 $V_{L,i}, V_{L,j}$ と液架橋分配係数 ϕ より

$$V_b = \phi (V_{L,i} + V_{L,j}), \quad (2)$$

で与えられる。

有効半径

$$r_{\text{eff}} = \frac{r_i r_j}{r_i + r_j} \quad (3)$$

を用いると、表面張力 γ ，平均接触角 θ のとき，粒子が接触している ($\delta = 0$) 場合の毛管力は

$$F_{\text{cap}}^{(0)} = -2\pi r_{\text{eff}} \gamma \cos \theta \left(1 - \delta \sqrt{\frac{\pi r_{\text{eff}}}{2V_b}} \right), \quad (4)$$

となる (Rabinovich *et al.*, Langmuir, 2005)。

有限距離 $\delta > 0$ での一般化表式は

$$\alpha = \sqrt{\frac{\delta}{r_{\text{eff}}} \left(-1 + \sqrt{1 + \frac{2V_b}{\pi r_{\text{eff}} \delta^2}} \right)}, \quad (5)$$

$$d_{\text{sp}} = \frac{1}{2} \delta \left(-1 + \sqrt{1 + \frac{2V_b}{\pi r_{\text{eff}} \delta^2}} \right), \quad (6)$$

$$F_{\text{cap}} = -2\pi r_{\text{eff}} \gamma \left(\frac{\cos \theta}{1 + \frac{\delta}{2d_{\text{sp}}}} + \sin \alpha \sin(\alpha + \theta) \right). \quad (7)$$

橋が存在し得る最大距離 δ_{max} は

$$\delta_{\text{max}} = (1 + \frac{1}{2}\theta) \sqrt[3]{V_b} \quad (\text{単位換算係数省略}). \quad (8)$$

液中粘性率 μ に基づく軸方向（法線方向）ストークス抵抗は

$$F_{\text{vis}}^N = -6\pi\mu r_{\text{eff}} \frac{v_N}{\max(\delta_{\text{min}}, \delta)}, \quad (9)$$

ここで v_N は粒子間相対法線速度, δ_{min} は数値安定化用最小隔壁である。

接線（せん断）粘性抵抗は改良 Cox - Brenner 近似

$$F_{\text{vis}}^T = -6\pi\mu r_{\text{eff}} \left[\frac{8}{15} \ln \left(\frac{\delta_{\text{ref}}}{\max(\delta, \delta_{\text{min}})} \right) + 0.9588 \right] v_T, \quad (10)$$

で与えられる (Nase *et al.*, 2008)。ここで v_T は相対接線速度, δ_{ref} はキャリブレーションに用いる基準距離で, 本実装では δ_{min} を用いている。

毛管力と粘性力を合算した粒子間作用力ベクトルは

$$\mathbf{F} = (F_{\text{cap}} + F_{\text{vis}}^N) \mathbf{n} + F_{\text{vis}}^T \mathbf{t}, \quad (11)$$

ここで \mathbf{n} は粒子連結軸の単位法線ベクトル, \mathbf{t} は接線速度方向単位ベクトルである。

せん断抵抗が生み出すトルクは

$$\boldsymbol{\tau} = r_c \mathbf{n} \times (F_{\text{vis}}^T \mathbf{t}), \quad (12)$$

ただし r_c は接触半径であり, 粒子中心から作用線までの距離として近似的に半径 r_i (または r_j) を採る。

液架橋の生成条件は

$$\delta < \min(\delta_{\text{max}}, \delta_{\text{rupt}}), \quad (13)$$

破断条件は

$$\delta > \delta_{\text{rupt}}, \quad \delta_{\text{rupt}} = (\eta - 1)(r_i + r_j), \quad (14)$$

で与えられる。ここで η はユーザ指定の最大分離距離比であり, $1 < \eta \leq O(10)$ が典型である。

橋破断時, 液量は保存され各粒子 (もしくは壁要素) に分配される。体積保存より粒子 i への再付着液量 $V_{L,i}^{\text{new}}$ は

$$V_{L,i}^{\text{new}} = V_{L,i} + \frac{r_j^3}{r_i^3 + r_j^3} (V_b - \phi V_{L,i} - \phi V_{L,j}), \quad (15)$$

対称的に粒子 j にも分配される。壁が相手の場合は面積比を用いて同様に割り当てる。

以上より, Washino 粘性毛管モデルは

- | | |
|--------------|-------------|
| (i) 橋生成判定 | (13), |
| (ii) 毛管力 | (4), (7), |
| (iii) 粘性抵抗 | (9), (10), |
| (iv) 力・トルク合成 | (11), (12), |
| (v) 橋破断と液分配 | (14), (15), |

の 5 つの構成要素で構築されている。これにより, 液含浸粒子系における微小時間 Δt 内の運動方程式

$$m \frac{d\mathbf{v}}{dt} = \sum \mathbf{F}, \quad I \frac{d\boldsymbol{\omega}}{dt} = \sum \boldsymbol{\tau}, \quad (16)$$

を安定かつ物理的に実装できる。ここで m, I は質量と慣性モーメント, $\mathbf{v}, \boldsymbol{\omega}$ は並進・回転速度である。